

令和 3 年 1 月 21 日

若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 201980517

氏 名

原田 麻衣
(氏名は必ず自署すること)

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。
なお、下記記載の内容については相違ありません。

記

- 派遣先: 都市名 パリ (国名 フランス)
- 研究課題名 (和文) : フランソワ・トリュフォーの映画制作過程における脚本の役割
- 派遣期間: 令和 2 年 2 月 14 日～ 令和 2 年 12 月 23 日 (314 日間)
- 受入機関名・部局名: パリ第3大学 (Sorbonne Nouvelle - Paris 3)
- 派遣先で従事した研究内容と研究状況 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

【研究内容】

本研究は、フランソワ・トリュフォー作品における語りの構造がどのように構築されているのかを考察し、その作家的特徴を明らかにしようとするものである。これまでトリュフォー作品の語りに関しては、「一人称単数の映画」という観点から物語へのトリュフォーの介入が議論の中心となってきた。報告者は先行研究を引き継ぎつつも、さらにカメラの動きや編集によって可能となる語りに着目し、それらが物語で果たす機能を考察している。そのさい有効となるのが脚本資料である。これまでの報告者の研究から、トリュフォーの脚本資料は映画だけでは特定困難な語りのレベルを読み取るための一つの手段となりうる事が判明しており、さらにアダプテーション作品に関しては原作、脚本、映画という三つのテキストを参照することで語りの構造の生成をより明確に把握できると考えた。したがって今回の派遣では、シネマテーク・フランセーズに所蔵されているトリュフォーによるアダプテーション作品の脚本資料の調査・分析を中心に、トリュフォー的語りの生成について研究を進めた。

【研究状況】

派遣期間中に行った研究は以下2点にまとめられる。

①シネマテーク・フランセーズでの一次資料の調査: 今回はトリュフォーによる初期のアダプテーション作品『あこがれ』(1957)、『ピアニストを撃て』(1960)、『突然炎のごとく』(1961)、また『突然炎のごとく』と同じ原作者の作品を翻案した『恋のエチュード』(1971)を調査対象とし、まずは脚本資料を中心とした詳細な目録を作成した。そしてそれぞれの作品に関して、原作の語りが脚本においてどのように現れているかを分析した。

②戦後フランスにおけるアダプテーション作品の歴史的考察: 『あこがれ』に関する論文を準備するうえでトリュフォーがアダプテーションについて論じた文章、とりわけ「フランス映画のある種の傾向」(1954)の再考が必要であると考えた。文中で言及される作品のうち日本では入手不可能なものを重点的にフランス国立図書館で視聴し、補足的に戦後フランスにおけるアダプテーション作品の考察を行った。また、同時代の映画批評の場で盛んに行われたアダプテーションの議論を整理・検討し、トリュフォーのテキストとの比較材料とした。

6 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

【研究成果発表等の見通し】

本プログラムでの研究成果については、まず一部を『あこがれ』論としてまとめ、2021年3月の『映像学』に投稿する予定である。その他については『映画研究』と『表象』への論文投稿を考えている。それらはすべて最終的に博士論文として統合させていく。

【今後の研究計画の方向性】

トリュフォーがアダプテーション作品において原作のテキストを引用することはよく知られているが、今回の調査をとおして原作のジャンルによってテキストの使い方に差異があると分かった。したがって今後は、原作のテキストの使用法で12作品存在するトリュフォーのアダプテーション作品を分類し、語りの構造の翻案について考察を進めていく。そのさい、原作から映画への翻案過程を示す脚本資料は、トリュフォーによるアダプテーション方法を解明するための重要な手がかりとなるだろう。

また、トリュフォーの映画制作過程において「書かれた映画」として存在する脚本は、それ自体が独自の文体を獲得している。そのような脚本と映画の関係性を明確化するために、言葉と映像あるいは文学と映画という観点からすでに多くの研究がなされているジャンル・リリック・ゴダールやエリック・ロメールなど同時代作家における脚本／映画の関係性と比較していく。

7 本プログラムに採用されたことで得られたこと (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

今回の派遣で何より有意義だったのはトリュフォー研究の専門家であるDe Baecque教授による指導を受けられたことである。夏季休暇期間を除いて月に一度対面／オンラインでの面談があり、そこでトリュフォーに関する膨大な先行研究についてその方法論を整理しつつ議論できたことは、自身の研究の方向性を明確化していくうえで非常に重要だった。また、De Baecque教授のセミナーではまずジャン・リュック・ゴダール作品が、続いてクロード・シャブロール作品が課題として設定され、トリュフォーと同時代の作家に関して考察する機会を得た。そのさいフランス語運用能力が向上したことも成果の一つである。

次に、シネマテーク・フランセーズでのトリュフォー関連資料の調査は博士論文を執筆するうえで欠かせないことである。先述した4作品の脚本資料はとりわけ博士論文の軸となる作品であり、この段階で収集できたことは幸運だった。

さらに、専門分野を横断する院生とフランス語で書かれた物語論に関する読書会を行い、古典から最新の研究までを網羅的に検討できた。それぞれ異なるメディアを研究している院生と語りの問題について議論した経験は、今後の具体的な分析対象の一つとして「ナレーション」を設定することに繋がった。

周知のとおり新型コロナウイルスの影響で国や地域を跨いでの研究は非常に困難な状況にある。調査先のシネマテーク・フランセーズやフランス国立図書館、派遣先の大学が長期間閉鎖となり、当初予定していた研究計画のすべてを遂行することはやはりできなかった。しかしこのような時期でも海外に滞在して研究を続け、ロックダウンの合間を縫って調査先に出向き資料収集ができたこと、それを可能としてくれた環境に心から感謝したい。